社会的ネットワークの理論的再検討

陳　立行

1．問題提起

社会的ネットワーク論は1960年代以来、さまざまな分野で研究のアプローチとして応用されている。社会的ネットワークの概念は社会人類学の分野で導入されはじめ、その後だんだん社会学の領域にも用いられるようになった。たとえば、フィッシャー（Fischer C.S ）の現代における近隣社会の研究や、ボット（Bott E）の家族内部の役割行動に関する研究においては、社会的ネットワークは個人の行動を説明し、個人と個人の間の相互関連の形式を説明するための手段として使われている。このようなアプローチは従来の構造機能分析の不足を補って、人間行動の図表を描くことを可能とした。

しかし、社会的ネットワークを人々の社会的関係の総括と捉えるならば、それが単に研究のアプローチとして扱われるだけでは、不十分であると言わざるを得ない。社会的関係は実在物として、経済分配の不平等、人々の精神的孤独などの社会的問題をしばしば引き起こしてる。資本主義国にせよ、社会主義国にせよ、不正な経済的利益の獲得のためには、権力者と資本家の間の社会的ネットワークが不可欠の条件となっている。たしかに、社会主義国においては、公有制の確立によって、分配は形式的には平等となっている。資本の投資や、それによる生産の拡大を通じての、より多くの利益獲得の達成は困難である。しかし、それでもなお、社会的ネットワークを通じての利益獲得が実際に行われており、その帰結として、分配の不平等は依然として解消されないまま残されている。

したがって、このように新たに形成された不平等は、社会学的に見れば、実体として存在する社会的ネットワークが作用する結果だと言える。ところが、社会学の諸研究においては、従来、社会的ネットワークを研究のアプローチと

して扱うことに終始しており、社会的ネットワークそのものについては、理論的に余りにも曖昧である。したがって、このような社会現象を分析するためには社会的ネットワークを社会的実体として、社会学の研究対象として捉える必要があり、社会的ネットワークを研究のアプローチとして扱うだけでは不十分であろう。つまり、社会的ネットワークを分析の手段としてだけではなく、まさに研究の対象として捉え直さなければならないのである。

このように、社会的ネットワークを実体として捉え直すことが本稿の主要な目的であるが、理論的な検討のみにとどまらず、社会的ネットワークと現存する諸問題との関連を明らかにすることも、同時に問題意識として含んでいる。そのために、まず第２章において、比喩あるいは分析のアプローチとして出発した社会的ネットワーク概念の経緯を概括し、特に1960年代以降現在まで主流となっている、分析のアプローチとしての社会的ネットワークの概念整理を行う。これらの概念整理に基づいて、実体として社会的ネットワークを捉え、それを研究の対象とすることの必要性が導かれる。次に第３章において、社会的ネットワークを社会的実在物として捉えることによって初めて指摘することができるいくつかのネットワークの特性のうち、特に重要と思われるものを取りあげる。すなわち、一つは、社会的ネットワークが精神と物質という二つの性質を同時に含む連帯の統一体として捉えられるということ。また、社会的ネットワークは生産物として捉えられるということ。そして、社会的ネットワークは社会的構成態として捉えられるという三つの特性に関して、それぞれ検討する。第４章では、社会的実在物としての社会的ネットワークの形態の分析を行う。そこではまず、ネットワーク内部における二人間の関係とネットワーク全体という二つのレベルに分け、前者の形態を単一送信的関係と多重送信的関係という軸を通じて検討し、そのうえでネットワーク全体の形態を捉えるという手順を踏む。その際、単質的的ネットワークと多質的ネットワークの概念を提出する。最後に結論として、たとえ政府が自らの存在の正当化のために政治的、経済的平等を標榜していようとも、すなわち制度的には平等に見えようとも、実質的には、権力者による社会的ネットワークを用いた民衆からの搾取が存在していることを明らかにする。

2．比喩あるいは分析のアプローチとしての社会的ネットワーク

社会的ネットワークという言葉はもともと電子情報工学におけるネットワークという専門用語を引用して、人々の社会的関係をたとえることに用いられたものである。つまり、社会的行為を理解するために、複数の個人間の連結の特質を全体的に把握したうえで、その連結を社会的ネットワークと想定したのである。このように社会的ネットワークを比喩として用いる社会的行為の研究は、根本的に言えば、社会的関係の研究に属しているのである。

社会的関係は非常に曖昧な言葉であり、さまざまな視角から捉えられる。ここでは、社会的ネットワークと社会的関係との関連を明確にするために、いくつかの視角の中から象徴的行為理論と組織論の社会的関係に関する従来の研究を取り上げ、それらについて概観する。

クーリー（Cooley C.H）とミード（Mead G.H）は、象徴的行為理論の視角から社会的関係を捉えようとした。彼らは、心理学的アプローチを取り入れることによって、個人と他者との交渉を通じて形成される点を人間の社会的関係の発生と考える。クーリーは「社会と個人を同一の事象の集合的側面」と考えており、それらは「互いに分離することができない」としている［Cooley,1909=1977:127］。換言すれば、自我は人々の相互的伝達によって、社会的自我に発展するのである。ミードによれば、自我は「他者の態度に対する生物体の反応」である［Mead,1924=1973:186］。自我は社会関係を離れては存在しえないということが主張されている。彼らの理論は社会的行為の象徴的相互作用説と呼ばれ、人々のコミュニケーション、および、人間関係の発生を解明した。彼らの研究は社会行為における自我と他我の関係に着目した、社会的関係の分析と言える。彼らの把握する社会的関係とは、言い替えれば、社会心理が個人の行為を通してあらわれる結果だと言える。

また、メーヨー（Mayo G.E）、レスリスバーガ（Roethlisberger F.J）は、現代社会の組織集団内部における、人間の疎外、政治的抑圧などの諸問題を解決するため、人間関係論を提起した。それは、組織論の視角から、個人の間に自然発生的に形成されたインフォーマルグループの役割を究明することを主な目的としていた。彼らはインフォーマルグループが労働者の精神の安定や高い

労働意欲の保持に対して有効に作用しているということを主張し、良好な人間関係によって生産性が高まると結論づけている。インフォーマルグループの研究は組織成員の「感情の論理」に注目し、組織における成員の感情的凝集力の意味を明らかにした［Mayo,1933=1951/Roethlisberger,1937］。

インフォーマルグループの研究は、ともすれば殺伐とした人間関係になりやすい組織集団の中に精神的凝集剤を入れることを提唱しているが、これは根本的に、企業組織集団の機能を高めるため、限られた範囲内での個人の意欲と要求を満たすこと意味している。いわゆる人間関係論の研究が企業組織内部の組織化された集団内部の緊張と成員の不安を抑え、人々が高度に組織化され、かつ人々のストレスを解消する方法を模索するという、きわめて限定された範囲の問題しか扱いえないことが、これらによって示されていると言える。

以上概観してきたように、象徴的相互行為の視角にせよ、組織論の視角にせよ、人間関係をある特定の行為方式として扱っている。しかし、筆者が本稿において検討したいのは、ある特定の行為方式としての人間関係ではなく、社会構成体のレベルで、すなわち人々の間の社会的関係の総括的意味で、社会的ネットワークを人間の社会的実在物として把握することである。

しかし、社会的ネットワークを社会的実在物として捉え、それを論述する前に、従来の社会的ネットワークに関する捉え方を、その発端から応用の経緯まで概観し、さらにそれらの研究成果、有効性、および限界を指摘しておく。

社会学におけるネットワークという言葉は、現在までおもに二つの意味で捉えられてきている。まず初めに比喩的なものとして用いられ、その後、分析的なものとしても用いられるようになった。1950年代のいくつかの社会学著作の中で、一定の社会体系における相互関係性の複雑な組合せをネットワークにたとえ、これを社会的ネットワークと呼んだことが、この用語が社会学において用いられる契機となった。これらは言うまでもなく社会的ネットワークの比喩的な用法に入る。たとえば、ラドクリフ＝ブラウン（Radcliffe-Brown A.R ）は社会構造を「現実に存在している社会関係のネットワーク」として定義した［Radcliffe-Brown,1952=1975:18］。彼が用いたネットワークという言葉は社会構造との関連を詳しく触れられることなくとどまっていた。したがって、ここでのネットワークは、たしかに社会関係の相互関係性というイメージを喚起

したが、単なる比喩として使われているに過ぎないと言えるであろう。

1960年代にミッチェル（Mitchell J.C）は、個人が組み込まれている社会的関係は社会的ネットワークによって考察できると主張した。彼はネットワークを分析的概念として使用し、社会的関係を図式化することにより、体系的に人間の社会的関係を整理した。ミッチェルは、社会的ネットワークの性質を、原点（anchorage）、密度（density）、到着可能度（reachability）、および、強度（intensity）、頻度（frenquecy）、範囲またはネットワークの大きさ（arrangement）などの基本的な概念によって整理した。ミッチェルによれば、原点とは焦点となる特定の個人であり、密度とは焦点となる個人が接触している人々が互いに接触している程度である。また、到着可能度とは、特定の個人が彼または彼女にとって重要である他者に到着できる程度である。そして、範囲またはネットワークの大きさという概念は焦点となる個人が直接的かつ定期的接触を持っている人々の数である［Mitchell,1969=1983:24-42］。

ミッチェルのネットワークに関する概念は、個人の社会的行動を理解するために、複数の個人間の連結の特質を全体的に把握したうえで、社会的ネットワークを特定個人間の特定の連結と想定し、人間の社会的関係を計量化し、さらに図式化する試みである。前述の諸概念を用いることにより、社会的関係の分析が可能となるのである。ミッチェルのネットワークの基本概念は、その後のネットワーク論の展開上、先駆的な役割を果たしたと言える。というのも、ネットワークを分析手段として用いる用法は、単に比喩的なものとして用いる用法よりも、数理的手法などによって人間の社会的行為をはるかに詳しく表すことができるため、ミッチェル以降、このアプローチが広範囲で応用されるようになってきたからである。

ボワセベン（Boissevain J）はミッチェルのネットワークに関する考えを受けて、人々の社会的相互関係の考察を行った。彼によれば、「社会的ネットワークは抽象的な言い方をすれば、分散している点が線によって、連結されている状態と見ることができる。この点は人であり、線は社会的関係である」とされている［Boissevain,1974＝1986:47］。ボワセベンは社会的ネットワークに関する概念が社会的関係を考察する一つの手段として有効であると主張している。

社会的ネットワークに関する概念を用いた社会的行為の分析は、フィッシャーの研究にも見られる。フィッシャーはネットワークのアプローチによって、都市社会の人間関係を分析している。彼は、ネットワークに関する概念が、アプローチであるということを強く主張している。フィッシャーによれば、個人から放射しているネットワークは、その個人と社会をつなげている。したがって、社会はこの無数のネットワークによって構成された複雑な網と考えることができる［Fischer, 1977:17］。また、フィッシャーは、ネットワークの諸概念による計量分析を通じて、現代都市社会の居住者が心理的な安寧を享受するためには、近隣の仲間に加入しなければならないということを明らかにしている［Fischer,1977:163］。そして、同様な価値観にもとづいて選択された居住空間を通じて、成員相互に互いに愛着感が生まれるということを結論づけ、都市におけるコミュニティ（community ）的存在の意味を明らかにしている[1]。ここでは、近隣の間に互いに満足感をもたらし、それを維持することに対して、組織的あろいは制度的拘束は重要ではなく、それよりもむしろ自発的な意欲が重要であると強調されている。したがって、たとえ都市が組織化され、産業化されていても、根本的にはコミュニティ的な連帯感が人々の社会的ネットワークを支えているのである。

フィッシャーは、人々が空間に対する愛着感によって、空間の選択を行っているということを強調し、ネットワークのアプローチを通じて、都市社会において産業化や組織化が進展していようとも、依然としてコミュニティ的な人間関係も存続しているということを明らかにしている。ここには彼のコミュニティ崩壊の理論に対する否定、反論という問題意識が明確に表れている。しかし、多くのコミュニティ研究者たちが都市におけるコミュニティ再建を最終的な価値目標として置き、そこに結論を導いていたのに対し、フィッシャーはネットワークのアプローチを用いた計量分析の結果として、都市に依然としてコミュニティ的存在が残っていること結論づけているという点で、彼らの間には大きな違いがある。フィッシャーの主張の力点は、コミュニティの存在あるいは再建ではなく、あくまでもアプローチとしての社会的ネットワークの有用性に置かれていたのである。

以上本章で述べてきたことからもわかるように、ネットワーク研究は、比喩

的用法として出発したが、その後の経緯においては、分析のアプローチとして扱われることの方が主流となっており、かつ有効であると言える。しかし、社会的ネットワークそのものが何であるかということについての概念は、やはり不明確な状態にとどまっていると言わざるをえない。従って、社会構造を現実に存在している社会関係のネットワークとするような比喩的な定義やアプローチとしてのネットワーク論を超えて、社会的ネットワークそのものについて新たに検討する必要がある。

3．社会実在物としての社会的ネットワーク

社会全体のレベルで、社会的ネットワークそのものに対して、新たに定義することが必要になるとすれば、社会的ネットワークは単なる比喩的な手段としての意味や研究のアプローチの限界を超え、具体的な社会的実在物として、社会学研究の対象として捉え直さなければならない。このように、実体として捉えられる社会的ネットワークのいくつかの特性のうち、つぎの三点を取りあげ、それぞれを検討することによって、ネットワークそのものについての概念の曖昧さを、ある程度まで払拭することができよう。すなわち、第一に、社会的ネットワークは精神と物質の連帯の統一体として捉えられるということ。というのも、社会的ネットワークが、制度的につくられた上下関係を基盤とするような、いわばタテ的な組織関係ではなく、むしろヨコ的・自発的な関係を基盤とする人々の間を相互に支える情報を乗せる役割を果たしているからである。第二に、社会的ネットワークが潜在的に利益を獲られるという点で、生産物として捉えられるということ。第三に、社会的ネットワークは、それを通じて個人と個人がつながり、相互に依存しながら行動することによって、一つの行為様式のパターンになるという点で、社会的構成態として捉えられるということの三つである。以下、各々の特性について検討を行う。

（１）社会的ネットワーク＝連帯の統一体

社会的ネットワークは個人と個人、あるいは個人と集団の間の連帯の統一体

である。ところで、連帯という概念は、従来多様な意味で捉えられてきている。たとえば、デュルケーム（Durkheim E）は産業社会における分業に関して、機械的連帯と有機的連帯の概念を提起した［Durkheim, 1893=1971:28］。彼にとって、社会は外部から個人を拘束する道徳的存在であり、個人の意識には還元され得ない集合意識が社会的事実であるとして捉えられた。ここでの連帯はなんらかの社会的結果、社会的条件が外部に表出されることによって把握可能なものとされたのである。

また、テンニース（Tönnies F ）のゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念には、すでに精神的連帯と物質的連帯という意味が含まれていた。テンニースによればゲマインシャフトは相互に愛し合い、親しみ、ともに語り、考えあうという、いわば感情融合の結合である。それに対して、ゲゼルシャフトは互いに他者を自己の利害あるいは目的にもとづく手段とみなし、反対給付や返礼との交換でなければ他人のために与えることをしない、利害的な結合である。ただし、テンニースは、その両者があらゆる結合にかかわらず、本質的に分離した結合であるということを強調している。そのため、血のつながりによる家族、地縁による村落、友情による中世的都市をゲマインシャフトの例として、また大都市の生活をゲゼルシャフトの例として、それぞれあげているのである［Tönnies,1887=1957:28］。

デュルケームの機械的連帯と有機的連帯の概念にも、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念にも、ともに産業文明の出現による社会的構造の変化に伴う、人々の相互結合の形式の変化が主要な問題とされている。つまり、社会の性質の根本的な転換が外在的に表出されることによって把握可能なものとされたのである。

デュルケームやテンニースの連帯の概念以外にもさまざまな連帯の捉え方があるが、本稿で用いる連帯とは、社会的ネットワークに載せられている情報によって生まれた人々の間の相互関連の総括のことを意味する。だからこそ、社会的ネットワークを連帯の統一体と考えることができるのであるが、その連帯の統一体には精神的連帯と物質的連帯の二つが含まれている。精神的連帯は人々の観念的、価値的、内在的な相互関連と相互依存を指し、物質的連帯は互酬的、利益的交換関係を指している。両者は同時に存在し、お互いに転換しあう

ことができる。ここで強調すべきことは、社会的ネットワークが精神的連帯と物質的連帯の相互浸透と相互転換の総括であるということである。

社会的ネットワークは、いたるところに存在している。人々は企業内外の人間関係、近隣、同窓会、同郷会など多種多様な組織を通じて、社会的ネットワークを結び付け、社会生活の諸側面で自らの目標を達成するため、連帯を形成する。その中では精神的連帯と物質的連帯が相互に浸透し、ネットワークの性質を決めるのである。

社会的ネットワークは帰属的、情緒的、交換的、象徴的な関係によって結ばれている。その全ての関係が形成された契機は異なっており、しかも、一旦結ばれてた関係が永久にその性質を変えないとも限らない。人間の情緒、欲求などは絶えず変化し、それにつれて社会的ネットワークに載せられて流れる情報も絶えず変化する。たとえば、ＡとＢの間に交換的な活動を契機として交換的な人間関係が形成される場合、持続的な付き合いを通じて、互いに共通の価値観を持っていることが認識されるということも十分にあり得る。その結果として、両者の間に相互に交流する情報は物質的相互依存を離れて、精神的な交流になる場合も多くみられるのである。したがって、物質的連帯の中に精神的なものも存在していおり、同様に精神的連帯の中にも物質的連帯も存在していると言える。さらに言えば、人間がある行為を行うかどうかは、そのことによる損得勘定ばかりを考えるからではなく、そうすることの道徳的な是非をも考えるからでもある。つまり物質的利益を考慮するのと同時に、精神的なことも考えていることである。このように結ばれた社会的ネットワークは連帯の統一体として捉えるとこができる。

（２）社会的ネットワーク＝生産物

社会的ネットワークそのものは生産物として考えられる。すなわち、社会的ネットワークに載せられている情報は他の生産物と同様に、経済的価値を持っているのである。ここで注意すべきことは、社会的ネットワークが他の生産物のように交換の前提となっているのではなく、社会的ネットワークがすべての社会的活動を結び付け、情報の交流、機会の獲得などを大きく左右し、潜在的に経済的な利益取得の可能性を握っているということである。社会的ネットワ

ークが生産物であるということの根本的な意味はここにある。いかなる社会においても機会均等ということはあり得ないが、そのような実質的機会の不平等は、社会的ネットワークの作用によるところが大きいと言える。

ボワセベンは、事業家の活動を分析する際、事業家が制御する資源を二つの異なるタイプに分けている。彼は、「第一のタイプの資源は土地や雇用機会や専門的知識など個人が直接的に統制している資源であり、第二のタイプの資源は第一のタイプの資源を直接的に統制している人物や、あるいはそうした人物につながりのある人物との戦略上の接触である」と述べている［Boissevain, 1974=1986:205］。 第一のタイプの資源を言い替えれば、財力あるいは資本である。このタイプの資源を統制する人の多くのは実業家である。第二のタイプの資源、すなわち重要な人物との接触は、社会的ネットワークと捉えられる。このネットワークを通じて、価値物を獲得しようとしたり、あるいは少なくとも損失無しに事を運んだりすることが可能になる。ここで注目すべきことは権力である。権力は第一のタイプの資源と第二のタイプの資源の両方に対して統制力を持っている。しかしながら、二つのタイプの資源に対する統制力は、必ずしも同程度とは限らない。具体的な資本をほとんど持っておらず、しかも、第二のタイプの資源に対する統制力を強く持っているということもあり得る。この場合、第二のタイプの資源を通じて、利益を獲得する能力を持っていると言える。

たしかに、第一のタイプの資源を占有する度合によって、直接に獲得する利益の多寡に相違があろう。しかし、この第一のタイプの資源のみに注目しているだけでは余りに皮相的なものしかつかむことができない。そこで、第二のタイプの資源を社会的ネットワークとの関連において検討する必要がある。すなわち、第二のタイプの資源を持っている人がいかにして利益を獲られるかということである。彼らは財力こそ持っていないかもしれないが、重要なのは、彼らが財力者や権力者と社会的ネットワークを通じてつながっているということである。そのネットワークを通じて、情報や機会の獲得が可能となり、利益を獲ることができるのである。したがって、ネットワークは利益を獲得するために重要な役割を果たしている。このような社会的ネットワークは生産物として捉えることができる。

（３）社会的ネットワーク＝社会的構成態

社会的ネットワークは、個人のレベル、集団のレベル、社会のレベルで互いに交差する、一つの社会的構成態（social configuration）として考えられる。

社会的ネットワークを社会的構成態とする考え方は、ボワセベンのネットワーク研究にも見られる。しかし、彼は社会的ネットワークを諸個人の間の競争の結果であると主張している。彼によれば、個人は社会から圧力を受けているが、これは非人格的な社会や集団による圧力ではなく、相互依存のパターンに包摂された他の個人からの圧力なのである。相互依存し合う個人と彼らが形成する特定の構成態は互いに切り離して考察することはできない。両者の相互関係は決して静態的なものではなく、それ自体に固有の運動量や発達をもつ過程である[2]。ボワセベンが個人の行為を考察するうえで、ネットワークを社会全体の中に入れ、一種の社会構成態と見なしていることは、ネットワーク理論研究の一つの試みと言えるだろう。ボワセベンは相互作用をする諸個人と集団もしくは社会が両極に対峙する図式を設定している。

ボワセベンは、個人の相互競争のための相互依存を行動パターンとする社会的ネットワークを、その競争、依存の過程の結果として捉えている。そのため、個人がその過程において、いかにネットワークを操作するかということが、その個人がどれだけの利益を得ることができるか、あるいはどれだけの損失を被らなければならないかということの基準になる。社会的不平等の形成を、このように把握するならば、その不平等は社会と個人、あるいは階級と個人ではなく、個人と個人の間の問題として捉えられるにすぎず、結局のところ、社会的ネットワークはゲームの法則として社会生活を説明するのにすぎないものになってしまうのである。

無論、社会的ネットワークは個人的な相互競争、相互依存によって形成したものとして見なすことができるが、その相互競争と相互依存の過程における社会的諸側面の独立変数としての作用、役割を見過してはならない。たとえば、社会経済体系と政治体系および空間体系は社会的ネットワークの形成に大きな影響を与える。前市場経済体系における人々の社会的ネットワークはコミュニティの共同体内部の相互依存を通じて形成されたが、市場経済の登場につれて社会的ネットワークは経済競争との関連において形成されるようになってきた

のである。社会的ネットワークは単なる人々の相互競争と相互依存の運動の結果ではなく、社会的諸側面の諸要素の競争と欲求が人間の社会的生活のレベルに具体的に表出されたことによって把握可能なものとして考えられる。言い替えれば、社会的ネットワークは社会の諸側面に支配されるのである。

以上、社会的ネットワークの三つの特性に関して、理論的な検討を加えてきた。連帯の統一体としての社会的ネットワーク、生産物としての社会的ネットワーク、および、社会的構成態としての社会的ネットワークの、いずれの特性においても、分配の不平等や精神的孤独によって生じる社会的諸問題と関連する重要な示唆が含まれていると思われる。そして、繰り返しここで強調したいのは、いずれの特性も、社会的ネットワークを社会的実在物として扱うことによって、はじめて検討が可能であるということである。

それでは、次に、社会学の研究対象としての社会的ネットワークの形態の究明を行うこととする。

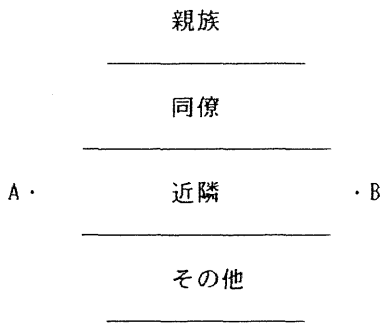
4．社会的ネットワークの形態

社会的ネットワークを社会的実在物であると考えれば、社会的構成態としての人々の相互連帯をささえる血縁関係や地縁関係、および人々の間のすべての社会的関係の総合が社会的ネットワークとして捉えられる。言い替えれば、社会的ネットワークは一つの社会的関係ではなく、複数の社会的関係の統一体である。したがって、社会的ネットワークの形態を考察する場合、二つの次元を区別する必要がある。一つは社会的ネットワーク内部の各々の関係の形態とそれらの間の関連、もう一つは社会的ネットワークの全体の形態である。社会的ネットワークの内部の形態については、二人の間の役割関係によって、単一送信的関係と多重的送信関係を再検討し、社会的ネットワークの全体の形態については、単質的ネットワークと多質的ネットワークの概念を提起する。

社会的ネットワーク内部における二つの点の間の関係について、ボワセベンの単一送信的関係と多重送信的関係の概念をあげることができる。単一の役割

関係に基づく二人の人物の間の社会的関係は単一送信的（uniplex ）あるいは単紐帯的（single-stranded ）関係として記述される。これに対して、多くの役割が重複している関係は多重送信的（multi-stranded）関係と呼ばれている。

多重送信的関係は次のように表すことができる。



この図で、ＡとＢはお互いに親族であると同時に同僚でもあり、かつ近隣関係も持っている。

二人の人の間に複数の役割関係が存在しているならば、互いにつき合う頻度が高くなり、その頻度が高くなると、両者が親しくなる可能性もまた高くなる。［Boissevain,1974=1986:27］。

ボワセベンは二つの点の間の多重送信的関係はおたがいに影響されることが多いので、単一送信的関係よりも圧力に対する適応が強く、両者の関係が親しいという仮説を提出しているが、これは再検討を要する。というのも、彼は多重送信関係内部における調整機能を見過ごしているからである。

先の図を見ると、もしＡとＢが二人とも親族という役割に対する主動的な感情と親和感を持っていれば、親族という線は他の線に対して調整する力が強い。つまり、ある線の両端のＡとＢが同時に主動的な親密感を持っており、その線が他の線を調整することができるならば、ＡとＢの関係は単線の場合よりも、複線の場合の方がより親密であると言えるだろう。しかし、図で示したところ

の四つの線のいずれに対しても主動的な親和感を持っていなければ、複線の中に充分な調整力を持った線がないと言える。従って、四つの線の中のどこかで問題が生ずると、それが他の線に影響を及ぼし、ＡとＢの関係は緊張した状態になる。

複数の関係の中では、必ず一つの関係が相対的に支配的な地位を占め、他の関係に対する統制の機能を持っている。もし、その支配的地位を占める関係が、両者の間に生じる諸問題を調和できるならば、その複数関係を持っている二人は親しくなる。すなわち複数の線の緊張が調整され、均衡を保つことができる。逆に、この支配的な関係の他の関係に対する統制力が弱ければ、複数の線のどこかで問題が生じた場合、それが他の線に影響を与え、二人の間に緊張が生まれやすいのである。

多重送信関係における調整機能の強さは、その多重送信関係において支配的地位を占めている関係の質によって、異なってくる。もちろん、前述したように、その関係は精神的連帯と物質的連帯の統一体であり、しかも、その両者は常に互いに転化しあうので、ある関係が純粋な精神的連帯であることも、純粋な物質的連帯であることもあり得ず、その関係の中に両者が混在しており、しかもその混在の様式も永続的なものではない。しかしながら、ある具体的な関係においては、精神的連帯が物質的連帯に対して相対的に優位であったり、あるいはその逆に、物資的連帯が精神的連帯に対して相対的に優位であったりする。この混在の様式が関係の質であり、これによって調整機能の強さに違いが生ずるということである。

ある二人の間の多重送信的関係で支配的地位を占める関係において、精神的連帯が物質的連帯に対して優位である場合、その関係の多重送信関係に対する調整の機能は比較的長く維持されると言えるが、逆に物質的連帯が優位である場合には、その関係が多重送信的関係に対して及ぼす調整機能はあまり長くは保たれないと言える。というのも、一旦物質的欲求が満たされれば、連帯感そのものが失われるからである。すなわち、たとえ役割関係が存在していようとも、連帯感がなくなると、多重送信的関係を調整する機能が失われることになるのである。

このため、多重送信的関係が多く存在している社会的ネットワークが長く存

続するためには、支配的地位を占めている関係において、精神的連帯が相対的に優位な地位を占めていることが非常に重要なことである。精神的連帯の統制力があれば、人々は親和的につき合うことができるのである。

次に、社会的ネットワークを結ぶ人々の所属集団によって単質的ネットワークと多質的ネットワークの概念を提起したい。

単質的社会的ネットワークとは、同質な集団、人種、階層などに帰属している人々の間で結ばれる社会的ネットワークである。それは空間的集中と空間的隔離および集団の単一化の結果だと言える。伝統的社会においては、空間の集中により、コミュニテイ内部に単質的ネットワークがよくみられるが、現代社会においては、空間の隔離と人種差別による単質的ネットワークも見られるのである。

多質的ネットワークとは、異質的集団、人種、階層などに帰属している人々の間で結ばれる社会的ネットワークである。この多質的ネットワークは近代都市社会によくみられるが、それは空間の移動や帰属集団の多元化と関連している。

以上示してきた諸概念のうち、単一送信的関係と単質的社会的ネットワーク、および多重送信的関係と多質的社会的ネットワークについては、ややもすると誤解を生じやすいと思われるので、それらの区別および関連をここで整理しておく。

単一送信的関係は社会的ネットワーク内部の二つの点の間で、単一の役割関係に基づいて結ばれた社会的関係を指しており、一方、単質的社会的ネットワークは社会的ネットワークを結んでいる全ての人が同質的集団、人種、階層に帰属していることを意味している。また、多重送信的関係は社会的ネットワークの内部の二つの点の間で多重の役割関係によって結ばれている社会的関係を指しているが、多質的社会的ネットワークは社会的ネットワークを結んでいる人々が、それぞれ異質的集団、人種、階層に帰属していることを意味している。単質的社会的ネットワークにおいては多重送信的関係が多く、逆に、多質的社会的ネットワークにおいては単質送信的関係が多いと言える。

単質的社会的ネットワークにおいては、ネットワークの中核に位置する人の影響力が強く、そのネットワークに対して支配地位を占めやすい。しかし、多

質的な社会的ネットワークにおいては、中核に位置する人が必ずしも支配な地位を占めるとは限らないのである。

前に言ったように、社会的ネットワークを社会実在物として捉えるならば、その形態によって、前章で検討した社会的ネットワークの諸特性の外在的表出には、それぞれある傾向がある。多質的ネットワークは、どちらかと言えば人々の連帯を拡大する役割を果すのに対して、単質的ネットワークは孤独感を引き起こしやすい。また、多質的社会的ネットワークは情報量が増大するにつれて単質的社会的ネットワークよりも、それを通じた利益の獲得が容易になると言える。

結論

本稿では、従来の研究のアプローチとしての社会的ネットワーク論の理論的限界を指摘して、社会的ネットワークを社会的実在物として考え直すことを提唱してきた。社会的ネットワークを社会的実在物として捉えたうえで人々の社会的ネットワークの形態を分析することを通じて、表面的には政治的、経済的に平等とされている社会においても、現実的には顕現しにくい部分での収奪の横行を明らかにすることが筆者の問題意識であった。筆者は社会主義国における一次元的社会的編成による、人々の社会的ネットワークの形態と性質の変化に関する実証研究を行っている。社会主義の理想とは、従来の搾取的生産関係と人間の社会的関係を破壊するということであり、人間の生産関係、社会的関係、人間の社会的あり方を根本的に変化させることを目指すものである。ところが、経済的公有制の施行に伴って、権力階級の社会的ネットワークの範囲がますます拡大しており、たとえ政府が自らの存在の正当化のために政治的、経済的平等を標榜していようとも、すなわち制度的には平等に見えようとも、実質的には、権力者による社会的ネットワークを用いた民衆からの搾取が存在していることは事実である。この点で見れば、社会的ネットワークを社会的実在体として、社会学の研究対象とすることは、非常に重要な意味を持っていると言える。

＜注＞

（１）フィッシャーは、近代都市において、近隣集団の互酬的および自発的な活動を通じて、人々の間に親密な関係が生じていることを指摘し、この親密な関係をコミュニティ的な関係として捉えられると主張している。Fischer, C.S. 1977 Network and Place — Social Relation in the Urban Setting, The Free Press.pp.11-12.

（２）ボワセベンは社会的構成態（social configurations）を、希少で価値ある資源を求めて競合する選択主体としての個人のネットワークと見なすべきだと主張している。Boissevain, J. 1974 Friends of Friends Network, Manipulators and Coalitions, Basil Blackwell and Mott LTD.=1986 岩上真珠、池岡義孝訳、『友達の友達』、未来社。pp.27.

＜文献＞

Boissevain, J. 1974 Friends of Friends, Network, Manipulators and Coalitions, Basil Blackwell and Mott LTD.=1986 岩上真珠、池岡義孝訳、『友達の友達』、未来社。

Bott, E. 1971 Family and Social Network, New York, Free Press

Cooley, C.H. 1909 Social Organization, Scribner's.=1977 大橋幸、菊池美代志訳、『社会組織論』、青木書店。

Durkheim, E. 1893 De La division du travail social — Édude sur l'organisation des sociétés supérieures, Paris, P.U.F.=1971 田原音和訳、『社会分業論』、青木書店。

Fischer, C.S. 1977 Network and Place — Social Relation in the Urban Setting, The Free Press.

Mayo, G.E. 1933 The Human Problems of an Industrial Civilization, Harvard University, Boston.=1951 村本栄一訳、『産業文明における人間問題』、日本能率協会。

Mead, G.H. 1934 Mind, Self and Society : from the Standpoint of Social Behaviorist, Harvard Univ. of Chicago Press.=1973 稲葉三

千男ほか訳、『精神、自我、社会』、青木書店。
Mitchell, J.C. ed. 1969 Social Network in Urban Situations, Manchester, Univ. of Manchester Press.＝1983 三雲正博ほか訳、『社会的ネットワーク』、国文社。
Radcliffe-Brown, A.R. 1952 Structure and Function in Primitive Society, London: Cohen and West.=1975 青柳まきこ訳、『未開社会における構造と機能』、新泉社。
Roethlisberger, F.J. & Dickson, W.J. 1939 Management and Worker, Harvard Univ. Press.
Tönnies, F. 1887 Gemeinschaft und Gesellschaft, Curtuis.=1957 杉之原寿一訳、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、岩波書店。

（ちん　りっこう／筑波大学大学院）